

すべてのものを包む光：無条件の受容

— 臨死体験の光に関する一考察 —

斎藤 忠資

臨死体験というのは、医学上死んだ状態に陥った人が経験する特異な意識の変容状態のことである。1970年代でアメリカで科学的な研究が始まり、現代ではヨーロッパにも波及し、国際的な学会が結成されている。臨死体験の事例には様々なローカル性もみられるが、体外離脱し、暗いトンネルを通過すると、光の世界があり、その後トンネルを通過して再び自分の肉体に呼び戻されるといふには、共通したコア要素とされている。

従って光の世界が臨死体験の中心（ゴール）である。そこで、その光の世界というのは、どのような特徴をもっているのか以下考察してみよう。

① 万物を包む光

臨死体験にみられる光は、すべてのものを包み、至る所に浸透している。¹⁾ その光は空間のみではなく、時間上も遍在していると言われている。²⁾ 従って光には過去・現在・未来の区別は無く、すべても♀野母のがいつでもどこでも、今ここに同時に存在している。代表的な事例を挙げると、

「白光はすべてを包括していた。私も通り過ぎたトンネルも宇宙全体も」³⁾

「光によって万物は互いに結合しているのみでなく、一つである。それは光と共に全体性を感じた。」⁴⁾

この光はその中心に人格を備えた生命体（being）を形成してる。⁵⁾

② 光の人格体と愛

光の人格体は物質界では経験したことのないような、純粹で全き愛の持ち主である点で、臨死体験者は一致している。⁶⁾

代表的な例を紹介しよう。

「光に包まれる。暖かさと愛が光から出る。光は人の形をした存在から発していた。光線がその人の全身を包んで輝いていた。私はしっかりと守られて安全で愛されていると感じた。」⁷⁾

「光から純粹な真実な愛。以前に経験したことのない、永遠に続く愛。妻や子ども達への愛や性的な愛とは比べものにならない愛を感じた。」⁸⁾

「百万倍も強くしたような母の愛としか言いようのない愛を光から感じた。」⁹⁾

「その光線は信じられない程強く、すべてを包み込む愛の力で私を貫いた。その愛は父なる神の愛と同じくらい深く清らかだったが、同時にそれと全く異なる純粹な憐れみや、欠けたところのない完全な共感をも含んでいた。」¹⁰⁾

「それは私がこれまで焦がれてきた光であり、愛と安らぎと望みであった。」¹¹⁾

この例は、この光は人間が生涯飢望している究極的関心と安らぎの実現である

ことを示している。

「すると、これまで経験したことのない強い愛情が伝わってきたのです。私は自分の子ども達を心から愛していますけど、あの時の愛情にはとてもかないません。」¹²⁾

「光の世界には完全な人格体があって、純粋な愛を備えていた。私は完全な心の安らぎと喜びと無条件の愛を感じた。」¹³⁾

「今まで味わったことのない光の愛と憐れみで私は満たされる。・・・私は憐れみの人格体と一体となった。」¹⁴⁾

「神の体から溢れ出る光には、あらゆる美、あらゆる愛、あらゆる善がふくまれていた。・・・時々光の精の存在を感じることもあるが、彼らも同じような光を発している。しかしそういう光も神が私に注いでくれた完璧な愛の光には及ばない。私は神の美しさの虜になった。」¹⁵⁾

「光は純粋な愛のエネルギーであった。」¹⁶⁾

「何が起ころうと、神（光のこと）が私を愛していることを私は常に知っている。」¹⁷⁾

これはローマ人への手紙 8 章 31～39 節を思い出させる。

③ 最も大切なものは愛

臨死体験者は、最も大切なものは愛であり、お互いに愛し合うことであることを、その体験から学んだという点で一致している。¹⁸⁾

典型的な事例をあげよう。

「重要な唯一のことは愛である。愛は問題になる唯一のことである。」¹⁹⁾

「愛こそ存在全体の最奥の中核、命の中核である。」²⁰⁾

「光は私に言った。“すべては愛である”。」²¹⁾

「一番大切なもの、それは愛ある。」²²⁾

「最も大切な命令とは、互いに愛し合うことです。この世では私達はお互いに結び合わされています。そして唯一つの究極の目的に向かって一つのものにされています。その究極の目的とは、お互いに愛を学び合うことなのです。」²³⁾

「光の世界では、エゴなき他人への愛が唯一大切なことであることが分かった。」²⁴⁾

言うまでもなく、パウロは I コリント 13 章で、愛を最も大いなるものとしている。ヨハネによる手紙は、神は愛であるとし、互いに愛し合うことを最も大切なこととして勧告している。

臨死体験者によれば、光とその愛こそが人間の核である。²⁵⁾

「愛こそすべての人間の核であり、宇宙の中心への架け橋である。」²⁶⁾ この光の愛こそ、すべての人が心から求めているものに他ならない。²⁷⁾ 愛は人間の願いの成就であるといわれている。²⁸⁾ それはすべての人が心から求めているもので、特定の宗教的信仰を前提としてはいない。それは P.テリップの言う「究極的関心事」である。

愛は存在全体の核なので、死によってすべてのものが消滅しても、愛のみは死を越えて永続するといわれている。

「すべてのものが消え去る時、我々が人生で感じた愛は残されるもののすべてである。」²⁹⁾

「この世界で達成したこと、金や名声は死ぬ時に一緒に持って行けない。一緒に持って行ける唯一のものは、あなたが与えた愛である。」³⁰⁾ これはパウロが I コリント 13 章で述べていることと同じである。

④ ありのままを受け入れることとしての無条件の愛

光の生命体が示す愛は、他者と自分を「受け入れる」ということである。代表的な例を引用する。

「光はそれまで経験したことのない絶対的な愛を私に示し、受け入れているのと同じように、私が他人を愛し、受け入れてきたかと尋ねた。」³¹⁾

「大きな強い光によって、自分が愛されているのを感じる。何もかもこれで良いという気持ちになり、私の全てが受け入れられている感じになる。」³²⁾

光の人格体の愛には、殆どの場合、「無条件の」という形容詞が付けられている。光の人格体は、「本人が多く弱さと欠点を持った人間であっても、一切の条件なしに」臨死体験者を受け入れる。その人間が倫理的に良い人間であることや完全であることを求められることはなく、ありのままの人間として受け入れる。完全であることを求めるのは、愛ではない。完全な人間は実際には存在していないし、弱さと欠点を持っていないような人間は現実には存在しないからである。あるがままの人間を受け入れるということは、その人間が存在するがゆえに受け入れるということであり、それ以上の要（例えば価値観・倫理観等）を含まないということである。その人間が受け入れる価値があるかどうかは問題にならないのでこのことはすべての人間を受け入れることを意味する。典型的な事例を紹介しよう。

「光はすべての人を等しく何の条件もなしに愛していた。我々は愛されるために何かを信じたり、行ったりする必要はない。我々がどのように人間があったか、今があるかは問題ではない。光はすべての人に心を配り、愛している。・・・光は『人間を愛しなさい』と私に要請した。」³³⁾

私はありのままの状態でもって光によって完全に愛され、受け入れられていたというのが最も驚くべきことである。受け入れてもらうために自分を正当化したり、努力したりする必要は感じなかった。まるで私のエッセンスそのものを知っていて受け入れているかのようにであった。」³⁴⁾

「光の純粋な愛の流れが私を貫いた時、私は光が“私はあなたが存在するがゆえに、あなたを完全に、またあるがままのすべてを愛する”と言っているように感じた。」³⁵⁾

「光そのものの方は、私をとことん知り尽くし、私のすべてを理解し、赦し、私を私としてあるがままに受け入れてくれる生命そのものでした。私は深い一体感に満たされていました。・・・これこそ、愛の極致でした。」³⁶⁾

最も驚くべき例は、次の子供時代に父親から性的虐待を受けた女性の臨死体験の事例である。

「光の中でこの女性は光に尋ねた。“すべての人がここに来るんですか？” 光は

“そうです”と答えた。“ヒットラーもですか？”と聞くと、光は“そうです”と答えた。“私の父もですか？”とこの女性が尋ねると、光は“そうです”と答えた。」³⁷⁾

光の being が、ありのままの自分を無条件に受け入れてくれたという事実から、他者があるがままに自分の望むような価値観を、条件を付けずに受け入れなければならないということを、臨死体験者は光の存在から求められている無条件の受容ということは単なる倫理的要請ではなく、光の存在によって無条件に受容され、受け入れられているという事実を踏まえて生きるようにということである。相手が受け入れる価値があるかどうかは問題にならない。代表的な例を引用しよう。

「光はすべての弱さと欠点を持ったままの私を受け入れることを学んだ。」³⁸⁾ 自分から条件を付けずに、ありのままを受け入れるということは、自分を取り巻く状況についても妥当する。³⁹⁾

又この「条件なしで」という形容詞には、行為に対して、相手から何らかの報いや見返りや賞讃を求めないということの意味している。「人間は愛に条件を付けて、愛に報いを期待するが、光の求める愛は報いを求めない条件なしの愛である。」⁴⁰⁾

「何の条件も付けずに、受け入れる」ということとは、本人の願望とか価値判断とか倫理観とか、何らかの見返りをあてにするといった、本人の利己的な判断を一切含まないということである。利己的な自己 (Ego) は、条件を付ける。従って、「条件なしの受容」は利己的な自己 (Ego) の死を前提としている。

「色々な人達、殆どすべての人達をそのまま受け入れている。私は彼らに私のやり方を押し付けようとは思いません。・・・そういう人々をそのまま受け入れる能力、自分があってももらいたいと思うような彼らであるからでなく、あるがままに彼らを愛する能力。これはみんな変わったことです。」⁴¹⁾

⑤ 裁かず赦すこととしての無条件の愛

光の人格体は臨死体験者を一切条件を付けずに、ありのままの状態を受け入れるということは、現実には弱さと欠点のないような人間はいないので、裁くことなく赦して受け入れるということなしにはあり得ない。臨死体験者は他者や自分を裁かずに、赦して一切の条件を付けずに受け入れることを光の人格体から求められる。我々は心から愛する者には、すべてを裁くことなく、赦し受け入れる。赦さずに裁くということは、相手を排除 (否定) するということであり、相手を受け入れるということは、肯定するということである。赦すということは排除 (否定) していた相手を受け入れる (肯定する) ということである。臨死体験の代表的な例をあげよう。

「私を光の人格体以上に愛した人はいない。これ以上に裁くことなしに共感し励ましてくれた人はいない。光の人格体は愛であった。」⁴²⁾

「光は咎めたり、非難したりしなかった。私は光の人格体から、愛のみを受けた。」⁴³⁾ 光の存在が裁くことをしないで、赦して、無条件で臨死体験者を受け入れてくれたという事実から、他者や自分を裁くことなしに、赦して無条件で

受け入れるように、光から要請されているという例を挙げる。

「私たちはお互いに心から助け合わなければなりません。・・・隣人を見下したり、非難したりする権利はない。」⁴⁴⁾

先天的全盲者の Vicki は「光の存在から“あなたは愛することと赦すことについて学ぶ必要がある。」と言われて、地上に戻されている。⁴⁵⁾ この愛は無条件なので、「その人が愛と許しに価する人間かどうかは問題ではない。赦すべき人が否かをあなた自身が選択してはならない。」と言われている。⁴⁶⁾

「他者を裁くのは間違いであり、他者を赦さなくてはならない。」⁴⁷⁾

「私はすべてのことで、すべての人を赦した。それは神から愛と赦しを受けたためである。・・・神は私を一切裁くことをしなかった。」⁴⁸⁾

⑤ すべてのものを包む愛としての光

それでは何故光の人格体は、一切条件を付けずに裁かないで、すべてを赦して受け入れているのであろうか？それはすでに指摘したように、光の世界はすべてのものを包み込んで、すべてのものに浸透し、遍在しており、核（エッセンス）において、光のメンバーであるものを、排除したり、否定したりすることはないからである。光の世界は、すべての個（部分）が分離できない仕方で一つに統合された全体性を形成している。（量子的コヒーレンス・万物一体・Oneness）⁴⁹⁾ 愛は本質的に包み、統合する力である。光の無条件の受容（愛）には境界がなく、すべてのものを包んでいることを示している臨死体験の例を次に紹介しよう。

「個々の人間は光のネットの結合であり、光のネットワークは愛であり、光の beings、高次の自己へと結合される。我々は皆一つであり、Oneness は愛による相互結合である。」⁵⁰⁾

「光は無条件の愛で私を包んだ。私は光になった。私は完全だった。私は同時にすべてになった。」⁵¹⁾

「光は完全にすべてを包む無条件の愛であり、完全な安らぎと喜びと自由であった。」⁵²⁾

「光に無条件の裁きのない受容と、すべてを包む無条件の愛であった。」⁵³⁾

「私達は各々別個の存在であったても皆一つで、光り輝く一つのものの一部分であった。・・・私達は皆あの愛の光の中におり、各人は全体の一部をなし、その全体とは一つのものであった。」⁵⁴⁾

「最も純粋な愛は light body (energy body, spirit body) にみられる。そこには境界はない。まず無条件に、裁くことなく、自分自身を愛すれば、他者も同じように愛するようになる。」⁵⁵⁾

「光の無条件の愛には、境界（限界がない）。」⁵⁶⁾

⑥ 母子の絆と新約聖書

臨死体験者が垣間見た光の世界の無条件の受容と赦しという特徴に、この地上で最も近いのは母親の子供に対する愛であろう。もっとも人間的な弱さを伴

う不完全なアナロジーではあるが、臨死体験者の事例でも、「光は母が子供に対してのように無条件で私を愛してくれた。」と言われている。⁵⁷⁾ 母親は自分の子供をどのような子供でも、条件を付けずに受け入れる。悪いことをしても赦して受け入れる。人は愛するものを赦すという真理がここにみられる。子供は経済上の負担になるにもかかわらず、育児の苦労を喜んで引き受ける。これは人間の本性に属することで、特に宗教を前提としてはいない。イエスが神を「アバ」と呼び、旧約聖書が神と人間の関係を親子関係に譬えているのは、この点から見て重要である。

正義の名の下戦争が起こされる。正義と倫理と法律は、必ず悪人に対する裁きと刑罰を伴う。そこには真の意味での赦しはない。イエスと臨死体験の光の本質を比べてみると、イエスは「しかし、私の言葉を聞いているあなた方に言うておく。敵を愛し、あなた方を憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなた方を侮辱する者のために祈りなさい。・・・自分を愛してくれる人を愛したところで、あなた方にどんな恵みがあるだろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分に良くしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるだろうか。罪人でも同じことをしている。返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるだろうか。罪人でさえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなた方は敵を愛しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも情け深いからである。あなた方の父が憐れみ深いように、あなた方も憐れみ深い者となりなさい。」(ルカ 6,27~28. 32~36) と言っている。

敵を愛せということ、何も当てにしないで貸せということは、何の条件を付けずに他者を愛せということであろう。その根拠は、神が悪人にも情け深いからという点にある。臨死体験者の中にも光の愛に出会った人が、「私に害を加えた人々を私は愛する。」と言われている例がある。またイエスは「人を裁くな。そうすればあなた方も裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすればあなた方も罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすればあなた方も赦される。与えなさい。そうすればあなた方にも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、溢れるほどに量りをよくして、懐に入れてもらえる。あなた方は自分の量る秤で量り返されるからである。・・・あなたは兄弟の目にある、おが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向って、“あなたの目にある、おが屑を取らせて下さい”とどうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にある、おが屑を取り除くことができる。」(ルカ 6,37~38・41~42) と言われた。ここでイエスは、他者を自分の秤で裁くことなく、赦すように求めている。臨死体験者の中にも「他者への愛が人生の目的であることが分かった。私は誰も裁かない、私が裁けば、私は同じ仕方で裁かれる。」と言われている例がみられる。⁵⁸⁾ 赦しについては、イエスは「あなた方に言うておく、7回どころか7の70倍までも赦しなさい。」と言っている。(マタイ 18, 22)

イエスは律法を守らずユダヤ教の救いから排除されていた罪人・取税人・遊女

等を神の国を象徴する食事に招いた。パウロは律法（倫理）を条件とせず、人間の行為によらない神の恵みのみによる救いを唱えた。パウロは無条件の神の恵みによる救いの事実を根拠として、その前提に立って倫理的な生き方をの要請をしている。（ローマ人への手紙）親鸞は、人間の一切の計らいに拠らず、阿弥陀仏（無量寿光）の憐れみのみによる救いを説いた（自然法爾）。

註

- 1) BillV'sNDE,website NDERF.ORG. Dr.Susan's NDE, websiteNDERG.ORG; L.Zimmaman,website near-death.com; R.A.Moody, Life After Life,Bantam Books,New York,1976,76; L.Stewart, website near death. Com; Derry's NDE, website NDERF.ORG; K.Ring,Heading Toward Omega,Quill,New York,1984,156.
- 2) Whenn Time Stood Still, website NDERF.ORG.
- 3) S.S.Farr,What Tom Sawyer Learned From Dying,Hampton Roads Publishing Company,1993,27.
- 4) Ph.L.Berman,The Journey Home,Pocket Books,New York,1996,35.
- 5) Sirley,website,aleroycom;I.McCormarck,website.aglimpseofeternity.org; K.Ring & E.E.Valarino,Lessons From Light, Insight Books,New Yorkk,1998,44; R ムーディ、かいまみた死後の世界、評論社、1977,11 ; 鈴木秀子、死に行く者からの言葉、文芸春秋、1997,11.
- 6) R.ムーディ、かいまみた死後の世界 ; 79; K.リング、臨死体験、収録吉福伸逸編、意識の臨界点、雲母書房、1966,77.
- 7) P.M.H.Atwater, 光の彼方へ、ソニーマガジズ、1995,20.
- 8) M.Grey, Return from Death, Arkana, London, 1985, 54.
- 9) B. Harris, Full Circle, 222.
- 10) A. フェニモア、臨死体験でみた地獄の情景、同朋社出版、1995,148.
- 11)R.Wallace, The Burning Within, Gold Leaf Press, 1994, 95)
- 12)M.モース、臨死からの帰還、徳間書房、1993,210~212.
- 13)Anthony, N., NED website NDEF. CRG
- 14) J.Antonette, Whispers of the Soul, Quick Silver Prodnetions, Mt. Shasta, CA, 1998, 26.その他の例、R.Paraslow の NDE, website. Spiritual travel.org.
- 15)A.フェニモア、地獄情景、144~145..
- 16)K.Ring, Lessons 44.
- 17)H.Storm, My Descent into Death, Clairview, London, 2000, 32.
- 18)K.Ring, Lessons, 198 ; R.ムーディ、光の彼方に、TBS ブリタニカ、1990,60.
- 19)M.Horton's NDE, website mindspring. com.
- 20)D,S,Rogo, The Return from Silence, The Aquarian Press, 1987, 242..

- 21) K. Ring & E. E. Valarino, Lessons, 45.
- 22) B. イーディー、死んで私が体験したこと、同朋社出版、1995, 170.
- 23) B. イーディー、同書、145.
- 24) K. Williams, New-Death Experiences and the Afterlife の website. その他の例 : A.S. Gibson, Echoes from Eternity, Horizon Publishers, 1993, 221 ; B. イーディー、死んで、81.220 ; K. Ring, Omega ; R. Wallance, Burning, 116; A. フェニモア、地獄, 192; R. ムーディ、光の彼方に、85; Lisa's NDE, website NDERF.ORG.
- 25) J. Smith, website : Near-Death Experiences and the Afterlife ; K. Ring, Lessons, 198.
- 26) Frank , A's NDE , website NDERF. ORG.
- 27) L. Martin , Searching for Home, Cosnie Concepts, 125 ; K. michigane, 1996, Lessons, 189.
- 28) L. Stewart, website Near-Death Experiences and the Afterlife.
- 29) Lisa's NDE, NDERF home page.
- 30) L. Martin, Home, 17 .その他の例 : B. ムーディー、死んで、152.
- 31) J. アイバーソン、死後の生、NHK 出版、1993, 128.
- 32) 立花隆、臨死体験 上、文芸春秋、1994, 398. その他の例 : A.S. Gibson Echoes Sirly, website near-death.com ; aleroycom ; Eternity Horizon Publishers, website near-death. com ; David B's NDE, website NDERFORG ; L. Martin, Home, 16 ; Three Times Into The Light Vital Sign, Vol.21 No2, 18; R.A. Moody, Life, 59 ; B. Harris, Full Circle Pocket Books, 1990, 222..
- 33) K. Ring & E. E. Valarino : Lessons, 45~46.
- 34) J. C. Wintek, A Precious Encounter on The Other Side, D. Dogwood River Publishing, Kentucky, 48.
- 35) K. Ring & E. E. Valarino, Lessons, 46.
- 36) 鈴木秀子、死に行く者からの言葉、文芸春秋、1997, 11.
- 37) K. Ring & E. E. Valarino, Lessons 163, その他、K. Ring, Lessons 46 ; 立花隆、臨死体験 上、文芸春秋、1994, 388~389.
- 38) K. Ring, Omega, 103.
- 39) Frank A's NDE, website NDERF.ORG.
- 40) David B's NDE, website NDERF. ORG.
- 41) K. Ring, Life at Death, Quill, New York, 1982, 157. その他, C. サザランド、光のなかに再び生まれて、人文書院、1999, 159~175 ; Anarisa D's NDE, website NDERF. ORG.; R.A. Moody, Reflections on Life After Life, Bantam Books, New York, 1977, 95 ; K. Ring, Lessons, 45~46. ; P.M.H. Atwater, 光の彼方へ、94 ; C's NDE, website NDERF.ORG.
- 42) Sherry Marie Gideons, website ndeweb.com/ board 170.
- 43) A Near Death Experience, no 155, [http://www. Ndeweb. Com/ board 155. htm](http://www.Ndeweb.Com/board155.htm). その他の例 : I. McCormack, website aghimpseofeternity. org; A. S. Gibson, Glimpses of Eternity, Horizon Publishers, 1992, 146 ; K. Ring, Omega, 1984, 67. 103 ; D. Beitmen, website : Near-Death Experiences and the Afterlife.
- 44) B. ムディー、死んで、152.

- 45) K. Clark Sharp, *After the Life*, William Morrow, New York, 1995, 240.
- 46) 同書同頁.
- 47) A. S. Gibson, *Journeys Beyond Life*, Horizon Publishers, 1994, 224~255.
- 48) JoDee Chenam, website seattleiands.org. その他の例: L. Martin, *Searching*, 126.
- 49) 拙論、不可分の統合体としての光の世界、人間文化研究 13, 2004, 1~22.
- 50) L. Stemait, website: *Near-Death Experiences and the Afterlife*.
- 51) K. Ring, *Lessons*, 1998, 46.
- 52) Lana's NDE, website NDERF.ORG.
- 53) L. A therapist, website homestead.com
- 54) 片桐すみ子編訳、輪廻体験、人文書院、1991, 77.
- 55) L. Martin, 125~126.
- 56) *A New Death Experience*, no 171, website aleroy.com
- 57) Mary's NDE, website NDERF.ORG ; I. McCormack, <http://www.aglimpseofeternity.org/testimony.Doe.htm>.
- 58) JoyC's NDE, website NDERF.ORG.